（様式３）
博士論文の要約

博士論文題目：包摂的かつ協働的な博物館活動に関する研究―台湾の桃園市立大溪木芸生態博物館の実践を中心に
著者：邱君妮

本研究は、多様化し、複雑化する社会のなかで、博物館が、異なる文化間の対話をどのように実現させるのかについての方法論を見いだすことを目的としている。そこで、本論文では、博物館を巡る国際的な動向と台湾の博物館の展開に注目する。その上で、積極的に市民参画を受け入れている台湾の桃園市立大溪木芸生態博物館の活動を考察し、包摂的かつ協働的な博物館活動の方法論を明らかにする。

筆者が、本研究課題に着目した背景は、博物館を取り巻く社会的な環境の変化に伴い、従来の博物館の役割であった文化遺産の保存や活用、知識の創出だけではなく、新たな博物館の役割が求められていると考えたからである。そこで、従来の博物館にはなかった視点から新たな博物館の役割を実現させる方法として、筆者は包摂的かつ協働的な博物館活動の在り方に着目した。

筆者の考える包摂的かつ協働的な博物館活動とは、1970 年代の「新博物館学」をはじめとする博物館の概念に関する議論をもとにしている。これらの議論では博物館における様々な文化や価値観の存在を意識する「多様性」（diversity）、多様な視点のそれぞれの意義を見いだし、共存させる「公平性」（equity）、博物館を使用する多様性に対して平等のアクセスを支援する「アクセシビリティ」（accessibility）、誰も取り残されず、博物館に参画できる「包摂性」（inclusion）の概念（本論文では DEAI とする）が大きな話題となっており、現在の博物館活動を行なう重要な視点として定着してきている。

しかし、これらは現在の博物館活動のなかで、完全に実践できているとは言い難い。そこで、こうした課題を解決するため、本論文において「包摂性」と「協働性」は、「多様性」、「公平性」、「アクセシビリティ」を実践する方法論として捉えている。その上で、包摂的かつ協働的な博物館活動の在り方について着目し、人文系博物館の活動を中心に考察を行なった。歴史や文化をテーマとする人文系博物館に着目する理由は、従来の人文系博物館で示された歴史や文化の価値や普遍的な知識は、一元的な視点によって解釈され、展示されたものであることから、包摂性に問題があると指摘されている。こうした博物館の包摂性に関して、近年の博物館活動は、包摂的かつ協働的な場に転換する動きが世界各地でみられるようになっており、本論文の事例となる台湾の博物館でも活発な動きをみせている。

現在につながる台湾の博物館活動は、台湾が 19 世紀に日本の植民地支配を受けた時代にまで遡ることができる。また、戦後の戒厳令に代表される抑圧的な政治体制を経て、戒厳令解除後、民主化への道が進められ、様々な博物館活動が行なわれている。こうしたなか、台湾の博物館は、日本をはじめとする世界の博物館学の影響を受けつつ、25 年以上継続されている台湾独自の文化政策のもと、DEAI 概念を博物館の場に導入する博物館活動を展開している。その背景には、歴史的経緯に伴い、漢民族と原住民族をはじめ、様々な民族によって構成されている台湾の多族群社会がある。

台湾の社会は、歴史的経緯に伴い、漢民族と原住民族をはじめ、様々な民族によって構

成されている。漢民族は、中国大陸から台湾へ移住した時期によって「本省人」と「外省人」とに大別される。第二次世界大戦以前から台湾へ移住した漢民族とその子孫は「本省人」と呼ばれており、さらに出身地や言語の違いにより、大きく「閩南人」と「客家人」の２つに大別される。また、第二次世界大戦以後に国民政府とともに中国大陸から台湾に移住した人たちとその子孫は一般に「外省人」と呼ばれている。原住民族は台湾では「南島語族」とよばれるオーストロネシア系先住民族であり、公的には「原住民族」という呼称が用いられている。以上の「閩南人」、「客家人」、「外省人」、「原住民族」は、台湾では「四大族群」とよばれ、台湾社会を構成する基本的な民族とされてきた。一方、1990 年代以降、台湾には、中国・香港・マカオやベトナム、インドネシアといった東南アジア出身者が外国人配偶者として台湾に移住してきた。また、台湾社会の経済構造の変化に伴い、ゲストワーカーとして来台する外国人労働者の数が増加した。さらに、様々な目的で来台している外国人も増加している。こうした人々を「新住民」と称し、現在、大きな族群の１つとして捉えられている。このような多族群社会である台湾の博物館で展開されている博物館活動とは、多様な考え方を共存させていく、博物館に関わる全ての人々が対等な立場で協働し、多視点の活動が展開されなければならない。また、こうした台湾の博物館活動が、筆者の考える包摂的かつ協働的な博物館像である。

本論文のための調査研究は、2013 年 4 月から 2020 年 3 月に至るまで、文献調査と博物館調査、聞き取り調査を中心に行なったもので、予備調査、本調査と補足調査で得たものが含まれている。また、文献調査で使用した言語は、中国語、日本語、英語である。博物館調査と聞き取り調査で使用した言語は、中国語、台湾閩南語、日本語、英語である。

台湾の実践例は、予備調査を行なった上で、包摂と協働が一体となる方法論が、よりモデル的に観察できるよう、桃園市立大溪木芸生態博物館（以下、木博館とする）を調査地として選定した。木博館を主な調査地として選定した理由は、まず、台湾の多元文化を表す地域性にある。同館が所在する桃園市は、「本省人」、「外省人」、「原住民諸族」、「新住民」が共存する地域であり、台湾社会の背景である多元文化社会を代表する地域であるともいえる。また、文化政策との関係性にも注目した。台湾では、25 年以上継続されている台湾独自の文化政策のもと、「多様性」、「公平性」、「アクセシビリティ」、「包摂性」の概念を博物館の場に導入する博物館活動を展開している。これらの動向は、木博館の実践活動にすべて帰結するものであり、その活動の背景として重要なデータとなる。さらに、地域社会に開かれた博物館としてのアプローチである市民参画の導入に注目した。設立プロセスのみならず、開館後の運営にも市民参画を積極的に取り入れており、包摂的かつ協働的な博物館活動の実践を検討できることから、調査地として選定した。

次に、博物館の国際的な動向と台湾の博物館が目指していることを明らかにするため、博物館に関する国際会議や海外の博物館への現地調査を行なった。こうした調査では、先行研究では文献資料と聞き取りの調査を行なうことが多い。しかし、本研究では、より博物館に関する国際的な動向を把握するため、「Museum 2015」（2015 年・東京開催）や「ICOM 京都大会」（2019 年・京都開催）等の博物館に関する国際会議の企画・運営を行なうスタッフの一員として、内側から観察を行ない、関係者から、直接情報を収集する現地調査を行なった。その結果、世界各地の博物館関係者から、様々な博物館の動向に関する情報を

直接入手することができた。さらには台湾以外の博物館の現地調査の協力を得られる機会となった。本論文では、以上の調査により収集した資料、観察結果やインタビュー、会話などのデータを用いている。

序章、５つの章、終章という構成となっている本論文において、序章では、研究の背景及び目的、先行研究の整理を行なった。先行研究を通じて、DEAI の概念が定着するまで、現代の博物館に大きな影響を与えた「新博物館学」などの 1970 年代以降の諸概念をめぐる議論を整理した。その上で、包摂的かつ協働的な博物館活動の基本的な要素と考え方を把握した。その結果、今後の公平な社会へ変革するために、博物館の社会的役割の重視、また資源と責任の共有を通じて、多視点の包摂、文化間の理解を促進することなど DEAI を実践する博物館が重要であることを明確にした。また、社会に開かれた博物館へのアプローチとして応用された市民参画に関する議論を整理した。そして、博物館専門職員と市民の主体性、自立性の相互関係という研究課題の所在を示し、本論文の目的を検討するために、博物館専門職員の役割と自己省察、市民参画の協働・参画の在り方の二つのことが重要な課題であることを明らかにした。

第 1 章では、博物館に関する国際組織の活動に着目し、それぞれの組織で展開している DEAI に関する活動を振り返り、博物館の国際的な動向を把握した。なかでも博物館の定義の見直しに向けて作業を進めている ICOM の動きから、これからの博物館活動には、包摂的で協働的なプロセスを通じて、多視点を形成することが重要であることを指摘した。また、常に多様な市民の包摂、協働が、大きな課題を抱え、DEAI 活動を実践する必要性にせまられている都市博物館に着目し、４つの都市博物館活動の事例を考察し、「包摂性」と「協働性」の活動の実践には市民参画を取り入れることの有用性を示した。その上で、社会と博物館の在り方の相互関係について、博物館が包摂的かつ協働的な活動を通して社会と接続することの重要性と、「包摂性」と「協働性」が一体となることの必要性を確認した。そのことが第 2 章以降の台湾の事例研究を展開する背景となっている。

第 2 章では、歴史的及び社会的背景から、包摂的かつ協働的な博物館を求める台湾の状況について述べた。19 世紀以降の台湾の文化政策と博物館事業の展開を整理した上で、台湾社会の変容、特に戒厳令解除後の民主化の中で、政策として導入された DEAI を重視した博物館活動が、地域住民主体の博物館活動へと変遷していく状況を論じた。また、それぞれの族群による相互理解に向けて、文化行政に力を入れてきた台湾の事情を解き明かし、徐々に多文化共生を図ろうとする国策が台湾では形成されたことを指摘した。さらに、こうした台湾文化を再構築することに重点を置いた文化政策が、博物館事業と台湾文化を再認識しようとする市民主体の実践活動を結びつけるきっかけとなり、「DEAI 博物館」の実践を模索する段階に進んでいることを明らかにした。そして、台湾における「多元文化社会」を支える拠点の一つしての博物館の役割を確認した。

第 3 章では、台湾の博物館事業を包摂的かつ協働的な方向へ導いた重要な政策である「社区総体営造」と「地方文化館計画」の 2 つの政策を中心に論じた。まず、1994 年から推進されてきた社区総体営造の事業の展開を整理することを通じて、地域文化史の再発見の実体化運動によって、台湾の人々に、自身の文化を意識させるようになった経緯を示し、多様な価値観を共有・包摂する方向に転換したという意義を明らかにした。また、行政や専

門家が主導する政治や知識に対する権威を開放する動きが民主化を推進する試みとして、市民参画社会の構築及び文化的市民権の実践により、市民の主体性・自立性、専門家との協働性を養成に意義があることを示した。そして、2002 年から推進されている「地方文化館計画」について考察を行ない、市民参画によって地方の文化拠点である「地方文化館」を設置、整備する取り組みは、地域住民主体の歴史的、文化的表現を重視する特徴を明らかにした。また、こうした特徴が、テーマや形態が多様である台湾独自の地方博物館運動につながり、行政、専門家、住民との連携型の博物館づくりが徐々に形成されたことを示した。その結果、台湾は市民参画社会を軸として、多様で公正な社会を構築するために、博物館が拠点となって、「包摂性」と「協働性」の 2 つの概念を一体の方法論として導入し、台湾の独自の展開を見せていることを明らかにした。

第 4 章と第 5 章では、包摂的かつ協働的な台湾の博物館の具体例として、木博館、（正式名称「桃園市大溪区にある大溪木芸生態博物館」）を取り上げた。そして、地域住民、第三者専門家、博物館専門職員への聞き取り調査のデータに基づき、木博館の実践を通じて、包摂的かつ協働的な博物館活動の在り方について考察をした。

この 2 つの章では、木博館が設立される歴史的背景を整理した上で、地域と博物館の関係性を考察し、包摂的かつ協働的な博物館活動が実践されていく背景を明らかにした。そして、開館後、大溪木芸生態博物館で行われている地域住民を主体とした博物館活動を中心に考察を行なった。具体的には、2018 年に行なわれた基本構想の改定に至る経緯と変化、そしてボランティア、展示、街角館の 3 つの活動を取り上げ、その実践内容と変化から考察を行なった。その結果、木博館の実践では、博物館の資源、ノウハウ、権限の共有が大きな鍵になることを指摘した。また、博物館専門職員と地域住民の両者の協働によって、博物館で包摂性が実現され、「多様性」、「公平性」、「アクセシビリティ」の実践につながっていることを明らかにした。

終章では、第 1 章から第 5 章の論述を踏まえ、包摂的かつ協働的な博物館活動の実践では、市民の主体性や自立性だけではなく、博物館の意思決定権を持つ博物館専門職員の市民参画を取り込む姿勢が必要であるとした上で、これからの博物館活動の在り方を論じた。

ここでは、まず、博物館が積極的に日常生活のなかで博物館活動を行なう機会を創り出すべきであることを示した。そして、市民の自主性や主体性を強化し、異なる主張や立場を持つ人との協働力を育てるためには、市民参画を内包する博物館システムにさらなる検討を加えていく必要があることを提示した。次に、市民と博物館活動における資源の作り方や使い方を共有し、博物館活動の意義を共感させ、自発性を促すことが重要となることを示した。一方、包摂的かつ協働的な博物館活動の実践には、博物館の意思決定権を持つ博物館専門職員が、どれだけ自身の固定概念に縛られているかを意識し、自己省察を行ない、市民の主体性が必要であることの認識が必須であることを指摘した。また、博物館専門職員としての研究の蓄積を積み重ねていかなければならないことを指摘した。

さらに、既存の博物館の枠組みのなかで、包摂的で協働的な市民参画の導入は、既存の博物館では難しいという課題について、博物館連携の促進を示した。ここでは、それぞれの博物館の考え方を包摂し（共存させ）、協働しながら、「市民参画」を実現させ、多様で公平な社会への変革を促す拠点としての博物館が創出できるモデルを最後に提示した。